昭和六十年霜月の大御歌草稿

（京都産業大学名誉教授）所　功（84）

つとに阿川弘之氏から「類ひ稀な二十世紀の名君」と評された昭和天皇は、生涯に一万首近い御製（大御歌）を詠まれたという（歌会始元選者岡野弘彦氏）。そのうち、八七二首が『おほうなばら』（平成二年、読売新聞社）に収録されている。

しかも、長らく内舎人（うどねり）を務めた牧野名助氏に払い下げられていた紙束がある。それは昭和六十年（一九八五）から同六十三年まで折々にメモされた御歌稿にほかならないことを平成の終り近くに、朝日新聞社の中田絢子宮内記者が発見された（二四七首近くは既刊本未収録。末尾の一五首は既公表歌列記）。

私は不思議な縁でその解読を手伝い、編著『昭和天皇の大御歌』（平成三十一年、角川書店）に全二六二首も収載させて頂いた。このうち、冒頭近くの昭和六十年十一月分四首を拙編著から抄出し、その部分の御歌稿写真を付載する。　（令和七年十二月二十五日）

大正天皇の崩御により秩父宮の英國留學を途中中止せしこと

(3)浩宮の祝うれしき（も）弟を／おもへばかなしむかし（ふることしのび（て））しのびて。

〈頭注〉一、浩宮の祝は十一月二十五日にて大正天皇の崩御は大正十五年十二月二十五日なり。

㊟同六十年十一月二十五日条に「徳仁親王が英国における修学を終えて帰国につき、連翠北において晩餐を催される。皇太子・同妃・徳仁親王・正仁親王・同妃・故雍仁親王妃・宣仁親王・同妃・崇仁親王・寛仁親王・同妃・宜仁親王・憲仁親王・同妃、並びに鷹司和子・池田隆政・島津久永・同貴子が出席する」とある。

※「ふること」とは、大正十五年（一九二六）十二月二十五日の天皇崩御により、践祚された昭和天皇の弟宮の秩父宮雍仁親王が、英国留学を中止して帰国されたことを指す。

礼宮の成年式（十一月三十日）

(4)礼宮もおとなとなりて式あげし／みなととも〳〵（に）いはふけふかな。

㊟同六十年十一月三十日条に「満二十歳の誕生日を迎えた文仁親王の成年式が行われる。……午後一時より春秋の間において、文仁親王成年式加冠の儀（皇太子・同妃が主催）に臨まれる。……正殿松の間に出御され……身を鍛え心をみがき、皇族の本分を尽くすことを希望する旨のお言葉を賜う」とある。

大根（十一月）

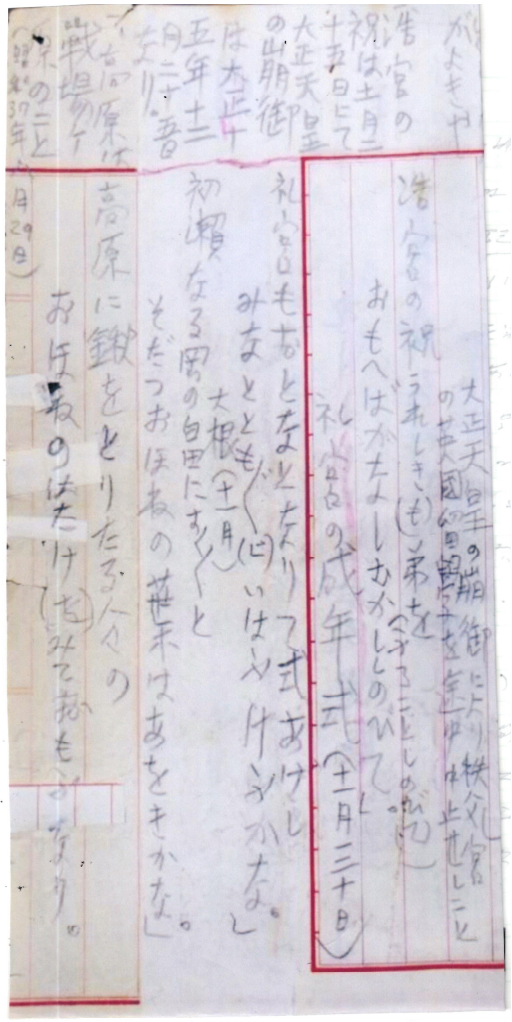
(5)初瀬なる岡の畠にすく〳〵と／そだつおほねの葉はあをきかな。

(6)高原に鍬をとりたる人々の／おほねのはたけ（を）みておもふなり。

〈頭注〉一、高原は戦場ヶ原のこと（昭和37年八月29日）

㊟同六十年十一月二十五日条「午前、宮殿北溜において、昭和六十年度農林水産祭における天皇杯受杯者等十四名の拝謁をお受けになる。……ついで宮殿中庭口において……受杯の対象となった農産品等及び業績を紹介する写真パネルを御覧になる」とある。

※(6)に関しては、㊟昭和三十七年八月二十九日条に「御泊所日光観光ホテルを御出発になり、戦場ヶ原開拓地に御到着になる。……終戦後に引揚者や復員者等が入植した同開拓地の状況や主要生産品の概況等をお聞きになり……励ましのお言葉を賜う」とある。



（上）所　功編著『昭和天皇の大御歌』補章「晩年の直筆大御歌草稿」より

（左）反故紙の貼り合せに綴られた御歌稿（平成30年末に中田絢子氏撮影提供）